

～連盟、東アジア地域代表部に勤めて～

国際医療救援部 主事 宮脇貴子

派遣地域: 中国、モンゴル

派遣期間: 2005年3月～2005年9月

平成17年3月から6ヶ月間にわたり、中国・モンゴルでの赤十字活動に携わってきました。HIV/エイズ対策である保健衛生事業の運営を任されてきましたので、今回その一旦を紹介します。

**\* 健康になって、家に帰ろう！**

～モンゴル赤十字社による刑務所 HIV/エイズ対策事業～



国際赤十字では、感染の拡大を防ぐためエイズ感染の予防教育活動や感染者へのケアだけでなく、偏見をなくすための啓発活動を重点的に展開しています。無知に起因する恐怖が HIV 感染者への偏見を生み出し、社会の暗部へと追いやり、感染が隠れて拡大してしまうからです。

私の業務は、モンゴル赤十字社をはじめ、中国紅十字会における HIV/エイズ対策事業の実施計画立案、財政報告書作成のサポートなど、マネジメント業務を中心に行ってきました。その事業の一つを紹介します。

日本赤十字社は、HIV/エイズ予防教育を含めたモンゴル赤十字社の保健事業を支援しています。モンゴル赤十字社では、「健康になって、家に帰ろう」というスローガンのもと、刑務所に入所している人々に対し「エイズ・ピア・エデュケーション」と呼ばれている、エイズ予防仲間教育を実施しています。

首都ウランバートルから北へおよそ100キロ、車で2時間ほどの広い草原の中に、白い壁で囲ま

れたマニット刑務所があります。ここでモンゴル赤十字社テュブ支部と刑務所内医療スタッフの協力により、エイズ予防仲間教育が行われています。これまでに入所者の中から 20 人が仲間教育のリーダーとして選ばれました。彼らは HIV/エイズを含む保健衛生の知識を集中的に学び、それを他の入所者に伝えています。また、入所者が主体となり、エイズ予防劇を作成・上演しています。劇中で実際に模型を使ってコンドームの使用方法を伝える他、コンドームを使用せず買春により HIV に感染した男性が、苦悩の中から友人の励ましにより再び生きる希望を取り戻すまでを、劇にしています。入所者自らが劇を作成する過程で HIV/エイズの知識が深まり、また、売春婦を含む登場人物を演じるにより、それぞれの心理と立場を理解し、予防のためにどんな行動が必要となるのか学ぶことができるのです。この劇に言葉はなく、すべて無言で行われます。最後に赤十字の歌を歌い、劇は終わります。



私は平成 17 年 3 月末から 6 ヶ月間、国際赤十字・赤新月社連盟、東アジア地域代表部の HIV/AIDS を中心とした保健要員の研修要員として、北京事務所へ派遣されました。医師でも看護師でもない、事務職員の私がどうして「保健要員」として派遣されるのか？それは、直接私が援助活動を行うのではなく、寄付金を受ける赤十字社が主体として開発事業を行う際、私はその資金の使用目的が適切であるか、内容は適切であるか、また効果はどうであったかなどを、連盟や寄付金を出した赤十字社や団体へ報告する役割のため、医療知識よりは運営能力を問われる仕事であるからです。

中国で赤十字は、HIV 感染者が HIV 感染者などへ、隣人や友人、家族に対するエイズ啓蒙教育と感染者介護の方法などを教えるピア・エデュケーション事業をはじめとする様々な事業を、30 省にわたり展開しています。私はそのうちの 2 省を訪問し、実際の活動の調査活動に関わりました。



中国紅十字会から渡されたエイズ予防に関するパンフレットを読む人

普段は北京事務所に勤め、中国語ではなく英語が共通語である国際的なスタッフに囲まれておりました。初めて「欧米人」に囲まれて仕事をする事となり、プレッシャーも大きかったのですが、それだけ充実感も大きなものでした。ただ、予想以上に移動が多く、半年間で20回も飛行機に乗ることになりました。そのほとんどが国際線です。一度は14時間遅れを経験し、待つことのつらさを十分味わうことになりました。

初めての海外派遣に上司はアメリカ人。派遣されてから1週間後に北京で「反日デモ」が起こり、日本大使館の近くに当時住んでいたため、近くに警官が増えものものしい雰囲気でした。派遣当初は緊張感からか体調を崩し、孤独感も強かったのですが、慣れるに従い「自分に何ができるのか？」ということを中心に考え、交渉することを学びました。

今後も、このような経験を生かして、赤十字運動を推進したいと思っています。